

**2 (2) その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付けなど。(※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)****特筆すべき教育活動**

1. 平成16年度、本研究科今井潤教授を拠点リーダーとして、21世紀COEプログラム「医薬開発統括学術分野創生と人材育成拠点」が採択された。医薬臨床開発の人材育成を目指した教育を実践するため、平成17年度からMCS (Master of Clinical Science)コースを設けた。平成18年度、このMCSコースの教育プログラムが、「高度で卓越した薬剤師の教育システム」として認められ、薬剤師認定制度認証機構から認証を受けた。
2. 次世代型薬剤師を組織的・継続的に育成するための特別教育研究経費「高度医療を担う次世代型専門薬剤師育成のための実践的臨床薬学教育システム構築」を申請し、平成20年度開始課題として採択され、「生活習慣病薬学分野」、「がん化学療法薬学分野」を新設した。

**特筆すべき研究活動**

1. 今井潤教授が中心となって、世界に類をみない臨床疫学研究である「大迫研究」、大規模介入試験である「HOMED-BP 研究」、大規模調査追跡研究である「J-HOME 研究」を行っている。そのうち「大迫研究」は21年の歴史をもつ臨床疫学研究であり、世界保健機構（WHO）における家庭血圧の高血圧国際基準の唯一の根拠となっている。
2. 寺崎哲也教授は、血液脳関門の輸送機能を評価する *in vivo* と *in vitro* の新規評価方法を開発し、特に、血液脳関門の脳から血液方向の輸送機構を解明し、*distinguished contributor and acknowledged leader in the advancement of the pharmaceutical sciences* として、平成16年 American Association of Pharmaceutical Scientists, Fellow の称号授与が授与された。さらに、平成19年、「血液脳関門機能と薬物の体内分布」研究に対して日本薬剤学会賞、「脳関門輸送研究の新技術開発と脳支援防御機構解明」研究に対して日本薬物動態学会賞が授与された。
3. 徳山英利教授は、新規反応の開発と効率的な合成設計により、抗腫瘍剤ビンブラスチンとピンクリスチンを代表例とした、構造的に複雑かつ医薬的に重要な生理活性を示す多数のアルカロイドの効率的かつ独創性の高い全合成を達成し、平成19年度の文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞した。
4. 青木淳賢教授がトップオーサーである「生理活性リゾリン脂質受容体のシグナル伝達」の研究領域は科学技術政策研究所によって世界で最も注目される研究 133 領域のひとつに選ばれた(科学新聞 2007年4月13日付け)

**特筆すべき社会貢献活動等**

1. 今井潤教授が中心となって行っている「大迫研究」は、生活習慣病、ならびにその合併症の発症の予防に貢献し、さらに、「J-HOME研究」は、降圧薬服用者において家庭血圧コントロールに関わる要因および予後・臓器障害との関連を明らかにするための臨床疫学研究であるが、対象患者は日本全国で3,400名を数えている。これらの研究成果が、直接患者へフィードバックされることにより個々の患者の治療に貢献するとともに、高血圧治療における適切な薬物療法を示すことになり、高血圧患者全体に対して貢献している。

**世界的・国内的位置付け**

1. 新薬開発に資する新しい方法論や技術の確立、薬物療法の効果向上および生命薬学の発展的理解などを目的とした研究に取り組み、質の高い成果を挙げている。これらの成果は、Nature, Nature Immunol., Cell, Mol. Cell., Proc. Natl. Acad. Sci., EMBO J等のインパクトファクターがきわめて高い専門誌に掲載された。これらのなかで、Cell に掲載された遺伝子修復に関する論文は、同じ Cell 誌の Leading Edge Previews に紹介され、また、EMBO Jに掲載された論文は、その後、Nature Immunol. 誌において研究ハイライトとして紹介された。
2. 文部科学省および学術振興会科学研究費の獲得のために研究科内で独自の方策を講じ、獲得額の大幅な向上に成功した。すなわち、平成19年度申請課題の採択率は約53%と高い水準に達し、研究科全体の交付額は年間約3億5000万円を上回り、前年度比167%と著しい伸長を示した。この成果は、教員各自の高い研究水準に基づくものである。また、平成18年度における科研費採択率の他大学薬学研究科（旧7帝大）との比較では、若手 (B)の採択件数がトップであり、この事実は若手研究者による研究の質の高さを物語っている。その他の研究資金に関しても、21世紀COEプログラム、新エネルギー・産業技術研究総合開発機構、医薬品医療機器総合機構、農業・生物系特定産業技術研究機構、科学技術振興機19年度は9億円を超え、平成15年度に比べ2倍以上に増加している。